2025年8月

第 31 回（令和七年度）定点調査

「水にかかわる生活意識調査」結果レポート

水の大切さ、ありがたさを感じている人は多いが、関心度は低い
高関心層は20代・30代の若者に多い傾向

＝調査期間：2025年5月28日(水)～6月3日(火)／対象エリア：東京圏・大阪圏・中京圏＝

ミツカン水の文化センターでは、今年6月に、東京圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）、大阪圏（大阪・兵庫・京都）、中京圏（愛知・三重・岐阜）の在住者1,500名を対象とした「水にかかわる生活意識調査」を実施し、集計結果をまとめました。

本調査は、1995年の第1回以降、日常生活と水のかかわりや意識を明らかにすることを目的とした定点調査として、継続性を重視する中に、その時々のトピックを取り入れながら調査を実施してまいりました。

今年は、毎年定番の設問や、2022年より実施している水への関心や感謝といった生活者の水への関心度を明らかにするための設問に加え、2020年に実施した「ペットボトル入りの水」に関する調査について、5年後の変化をみる趣旨で再度調査を行いました。また、今年も、当センターのアドバイザーである、東京大学 大学院工学系研究科 教授の沖大幹先生に、調査結果の解説をいただきました。

なお、今年の調査データおよび過去（第1回～30回）の集計概要など詳細な情報は、ミツカン水の文化センターのホームページ（https://www.mizu.gr.jp/）で公開しています。

《調査結果》

【１】水の大切さ、ありがたさは感じているが、関心はない？

…「大切だと思うか？」「ありがたさを感じるか？」「水への関心は？」に対し、
“より大切に思う層”8割超、“よりありがたさを感じる層”6割超も、高関心層は3割弱。
高関心層は20代が34.7%、30代が31.7%と若者に多い傾向。

【２】節水理由は社会的な大義から、よりパーソナルな方向にシフト？

…「節水行動を実践する理由は？」に対し、
「水は貴重な資源だから」「社会的に推進しているため」などの数値は減少、
「習慣になっているため」「教育を受けてきたため」などが増加。

【３】飲用としての水道水10点評価が7点台に

…「飲用水として水道水を10点満点で評価すると何点か？」に対し、
昨年6.86点→今年7.02点で、2015年以来の7点台となった。

◆沖大幹先生による解説 ～Oki’s View～

- **節水行動は増えているのか？：1995～2018年までの調査データと比べてみると…**
- **水道水への評価：水道水への満足度は増している？**
- **ペットボトル水の評価：環境影響への認識に個人差？**
- **水の日の認知度：関連記念日の乱立が認知に影響か？**

〔この件に関するお問い合わせ先〕
ミツカン水の文化センター ホームページ内、お問い合わせフォーム（下記URL）よりお願いいたします。
https://www.mizu.gr.jp/customer/group/mizu.html

※ミツカングループでは、テレワーク勤務を推進しております。
誠に恐縮ですが、ホームページからのお問い合わせへのご理解とご協力の程、何卒よろしくお願いいたします。

《結果の抜粋と掲載ページ》

■調査概要　2ページ

■水への関心

◇**高関心層は全体の3割弱**
最も多いのは20代、次いで30代　**…トピック【1】**　3ページ

◇**水を“より大切だと思っている層”は、全体の8割超**　3ページ

◇**3人に2人が、水に“よりありがたさを感じている”**　4ページ

◇水に関するインフラ老朽化への関心が若干高まる　4ページ

■節水の意識と行動

◇節水を意識している人、行動している人、いずれも増加　5ページ

◇日常生活で実践していることは取り組み率がやや減少　5ページ

◇**節水理由は社会的な大義から、よりパーソナルな方向にシフト？…トピック【2】**　6ページ

◇水への関心とは関係なく無意識に節水できている？　6ページ

◎**沖大幹先生による解説～Oki's View～① 節水行動は増えているのか？**　7ページ

■水道水に関する意識

◇水道水の評価、全体の平均点7.47点
大阪圏が7.57点で昨年に続きエリア別トップ　8ページ

◇**飲用としての水道水評価、全体の平均点が2015年以来の7点台…トピック【3】**　8ページ

◎**沖大幹先生による解説～Oki's View～② 水道水への評価**　9ページ

◇水道水への不満は半数近くが「不満なし」
「味」や「品質」への不満に地域差あり　9ページ

■「ペットボトル入りの水」に関する意識

◇飲む頻度は月1回未満の“ほとんど飲まない人”が過半数　10ページ

◇市販のペットボトル入りの水のイメージはポジティブな項目が上位を占めるも数値は減少　10ページ

◎**沖大幹先生による解説～Oki's View～③ ペットボトル水の評価**　11ページ

◇飲む頻度の増減意向は4人に1人以上が“増えると思っている”　11ページ

■水と生活・文化

◇知っている祝日・記念日、水に関する記念日の認知上がらず　12ページ

◎**沖大幹先生による解説～Oki's View～④ 水の日の認知度**　12ページ

【調査概要】

第31回（令和七年度）「水にかかわる生活意識調査」

◆調査対象数　：1,500人
◆調査対象者　：東京圏(東京、神奈川、埼玉、千葉)、大阪圏(大阪、兵庫、京都)、中京圏(愛知、三重、岐阜)に居住する20代～60代の男女
◆調 査 方 法　：インターネット調査
◆調 査 期 間　：2025年5月28日（水）～6月3日（火）
◆回収数（人）　：

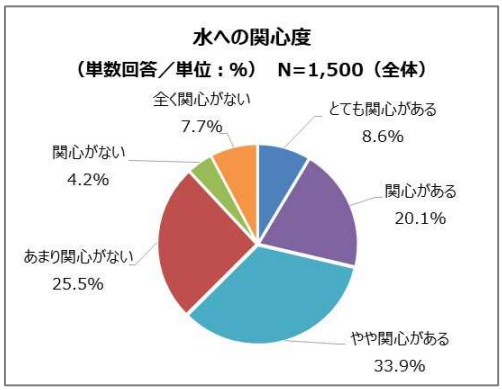
	東京圏		大阪圏		中京圏		合 計		
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	小計
20代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
30代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
40代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
50代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
60代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
合 計	250	250	250	250	250	250	750	750	1,500
	500		500		500				

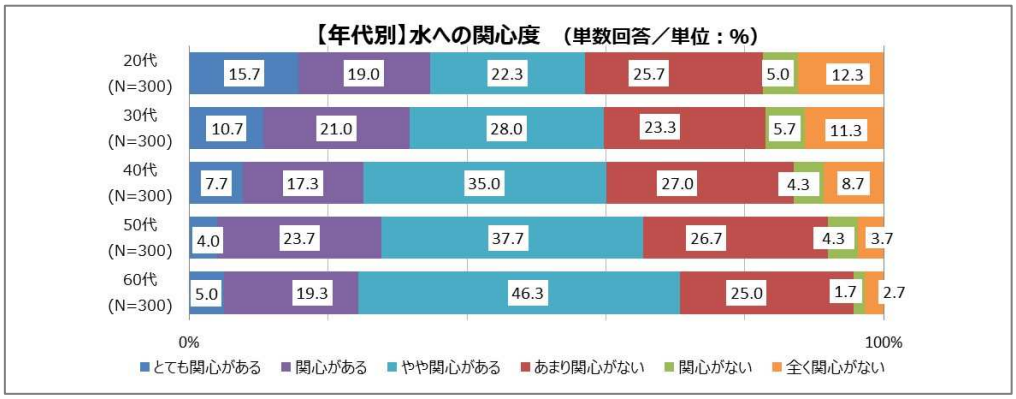
水への関心

Q.水への関心度は？（6択）

◇高関心層は全体の3割弱
**　最も多いのは20代、次いで30代**

水についてどの程度関心があるか聞いたところ、「とても関心がある」8.6%、「関心がある」20.1%、「やや関心がある」33.9%、「あまり関心がない」25.5%、「関心がない」4.2%、「全く関心がない」7.7%となりました。「とても関心がある」「関心がある」「やや関心がある」を合計した“関心あり層”は62.6%と６割を超えているものの、そこから「やや関心がある」を除いた高関心層は全体の３割弱（28.7%）でした。
年代別にみると、「とても関心がある」は20代・15.7%、30代・10.7%、40代・7.7%、50代・4.0%、60代・5.0%、「関心がある」は20代・19.0%、30代・21.0%、40代・17.3%、50代・23.7%、60代・19.3%でした。「とても関心がある」「関心がある」を合計した高関心層は20代（34.7%）が最多、次いで30代（31.7%）と、若者に多く見られました。

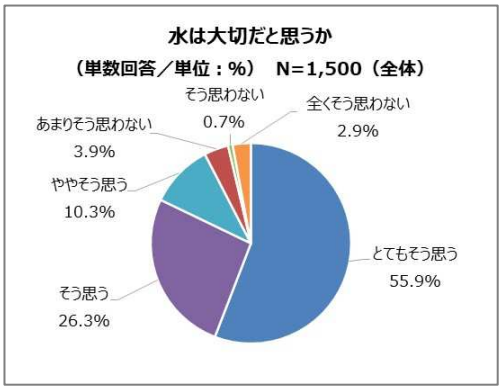


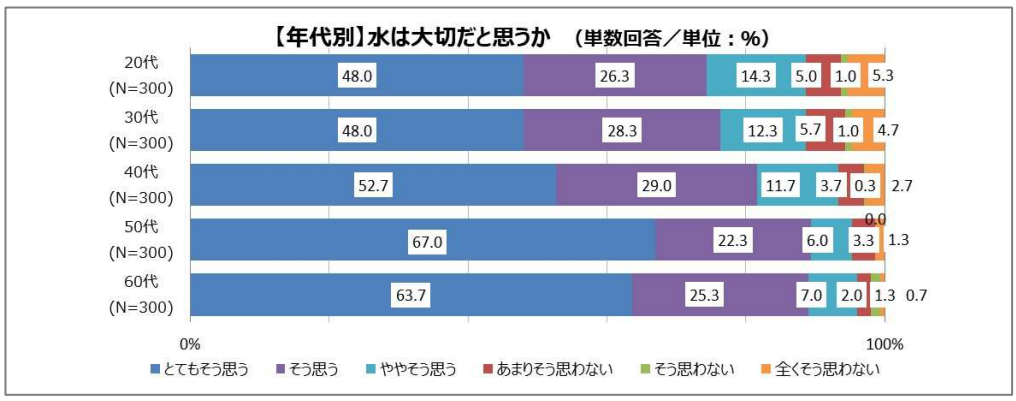


Q.水は大切だと思うか？（6択）

◇“より大切だと思っている層”が全体の8割超

水は大切だと思うかをたずねたところ、「とてもそう思う」55.9%、「そう思う」26.3%、「ややそう思う」10.3%、「あまりそう思わない」3.9%、「そう思わない」0.7%、「全くそう思わない」2.9%となりました。「とてもそう思う」「そう思う」「ややそう思う」を合計した“大切だと思っている人”は92.5%と全体の９割を超え、「ややそう思う」を除いた“より大切だと思っている層”に限定しても８割超（82.2%）でした。
年代別にみると、「とてもそう思う」は20代・48.0%、30代・48.0%、40代・52.7%、50代・67.0%、60代・63.7%と高い年代層に多く、「全くそう思わない」は20代・5.3%、30代・4.7%、40代・2.7%、50代・1.3%、60代・0.7%と低い年代層に多い傾向が見られました。

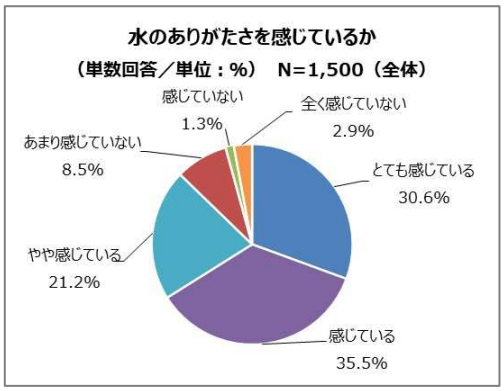


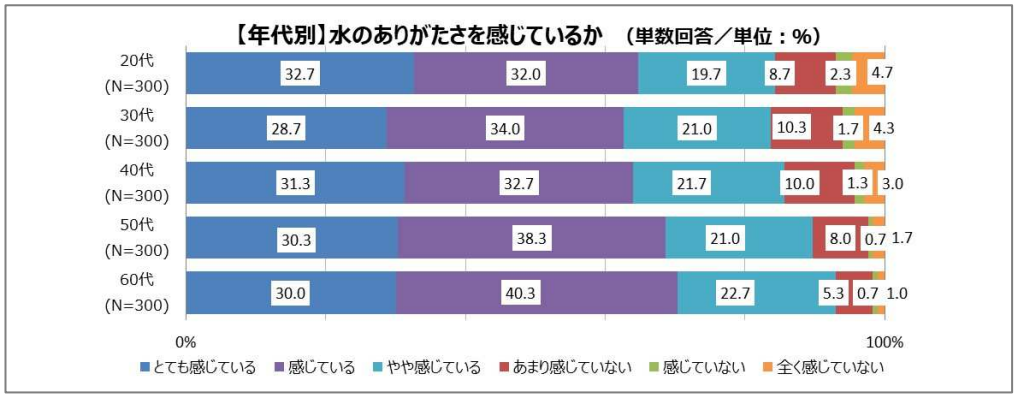


Q.水のありがたさを感じているか？（6択）

◇3人に2人が“よりありがたさを感じている”

水のありがたさを日々の生活で感じているかについては、「とても感じている」30.6%、「感じている」35.5%、「やや感じている」21.2%、「あまり感じていない」8.5%、「感じていない」1.3%、「全く感じていない」2.9%となりました。「とても感じている」「感じている」「やや感じている」を合計した“ありがたさを感じている人”は全体の約９割（87.3%）で、「やや感じている」を除いて“よりありがたさを感じている層”に限った場合でも66.1%という結果でした。
年代別にみると、「とても感じている」は、昨年最も低かった20代が増加（昨年25.0%→今年32.7%）した一方で、最も高かった60代が減少（昨年36.7%→今年30.0%）し、20代が年代別のトップとなりました。

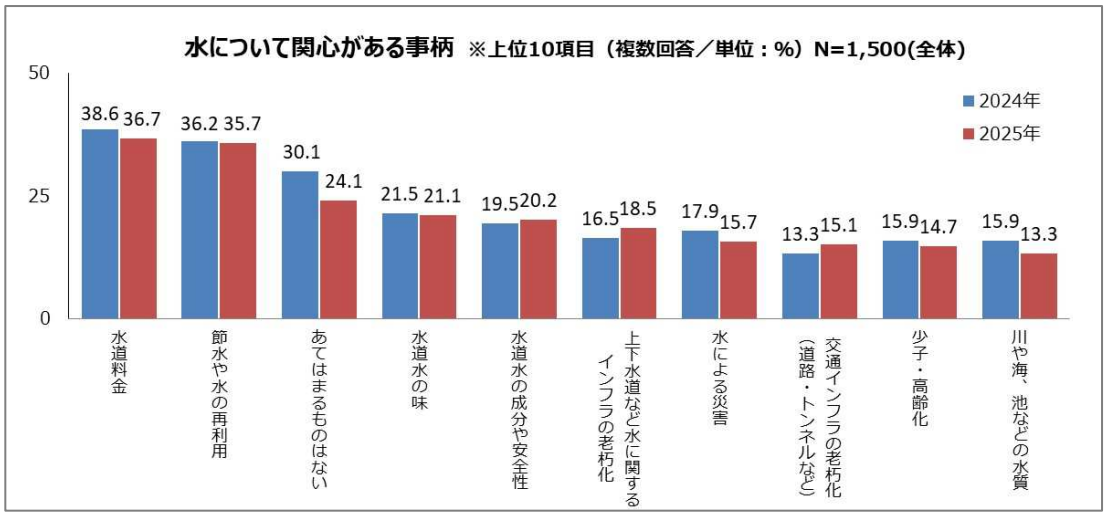




Q.水について関心がある事柄は？（29択+その他+あてはまるものはない）

◇水に関するインフラ老朽化への関心が若干高まる

水に関するさまざまな事柄（一部、水関連以外の事柄も含む）を選択肢にあげ、関心があることを選んでもらったところ、トップ3は、1位「水道料金」（36.7%）、2位「節水や水の再利用」（35.7%）、3位「あてはまるものはない」（24.1%）となり、以下は4位「水道水の味」（21.1%）、5位「水道水の成分や安全性」（20.2%）、6位「上下水道など水に関するインフラの老朽化」（18.5%）と続きました。昨年と比較すると、上位に入った項目自体にはあまり変化はなかったものの、各項目の数値は概ね減少しました。ただ、こうした中で「上下水道など水に関するインフラの老朽化」の数値は若干増加。今年発生した埼玉県八潮市の道路陥没事故をはじめ、各地の上下水道管の老朽化によるトラブルに関する報道等の影響を感じさせる結果となりました。

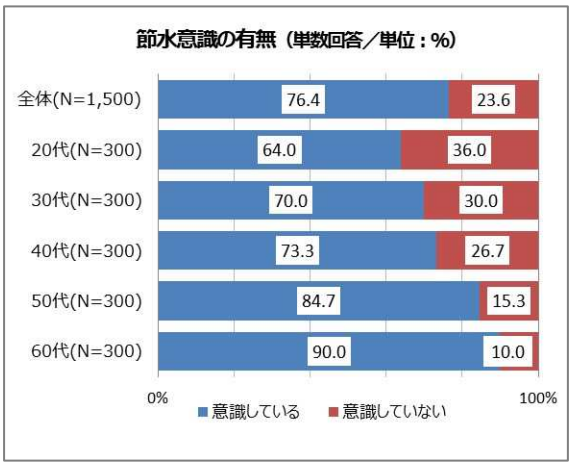


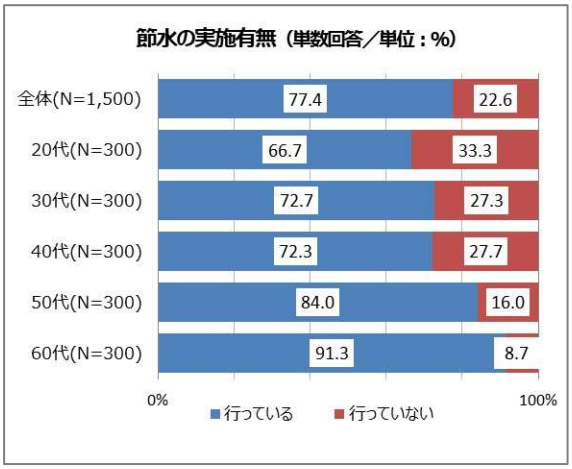
節水の意識と行動

Q.日常生活で節水を意識しているか？（2択）
Q.日常生活で節水を実施しているか？（2択）

◇意識している人、行動している人、いずれも増加

節水への意識と行動は、節水を「意識している」が76.4%、節水を「行っている」が77.4%となり、いずれも昨年から増加しました。年代別でみると、節水を「意識している」については、もともと9割超と高かった60代は横ばいも、他の年代はすべて昨年より増加。節水を「行っている」については、20代から60代までの全年代で増加しました。

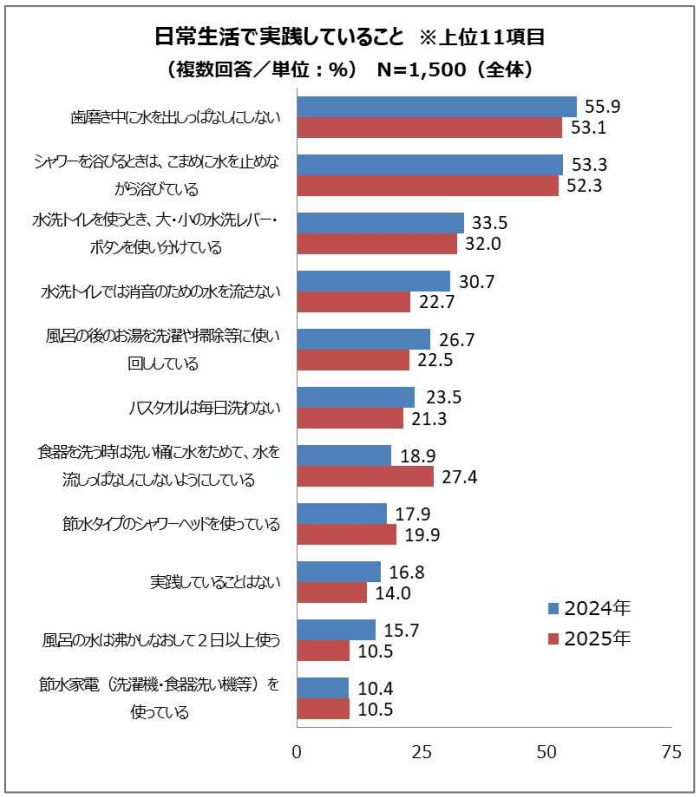




Q.日常生活で実践していることは？（14択＋その他＋実践していることはない）

◇取り組み率がやや減少

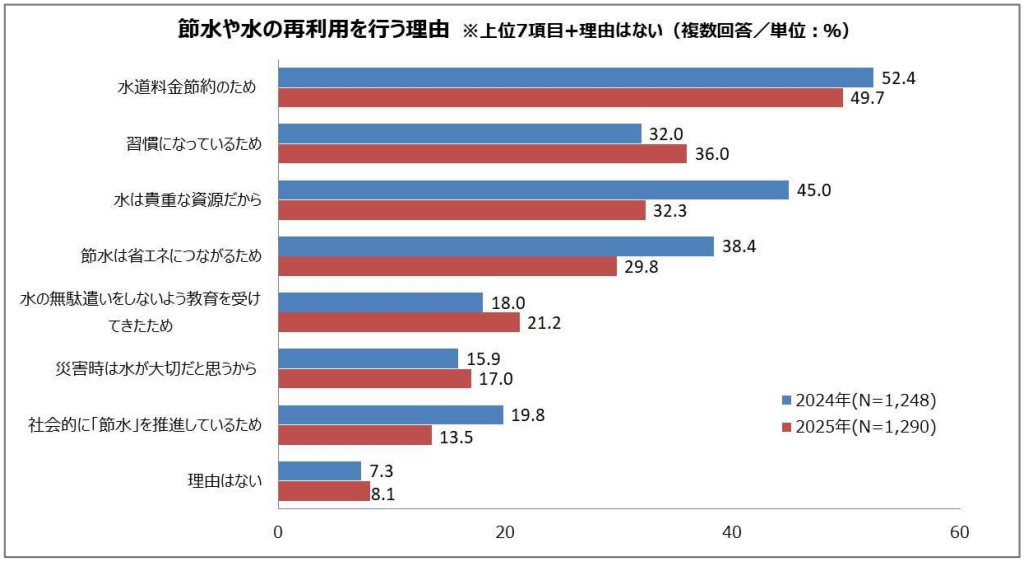
節水や水の再利用方法に関する項目を選択肢にあげ、日常生活で実践していることとして聞いたところ、1位「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」（53.1%）、2位「シャワーを浴びる時は、こまめに水を止めながら浴びている」（52.3%）、3位「水洗トイレを使う時、大・小の水洗レバー・ボタンを使い分けている」（32.0%）、4位「食器を洗う時は洗い桶に水をためて、水を流しっぱなしにしないようにしている」（27.4%）、5位「水洗トイレでは消音のための水を流さない」（22.7%）となりました。傾向としては、全体的に昨年より数値が減少。前述の節水実施率の上昇とは裏腹に、各項目の取り組み率は低下する結果となりました。なお、上位5項目の中で唯一、数値が増加した「食器を洗う時は洗い桶に水をためて、水を流しっぱなしにしないようにしている」については、「節水家電（洗濯機・食器洗い機等）を使っている」の数値が昨年からほぼ横ばいの1割程度（昨年10.4%→今年10.5%）であることから、単純に手洗いの機会減少による結果ということでもなさそうです。



Q.節水や水の再利用を行う理由は？（13択+その他+理由はない）

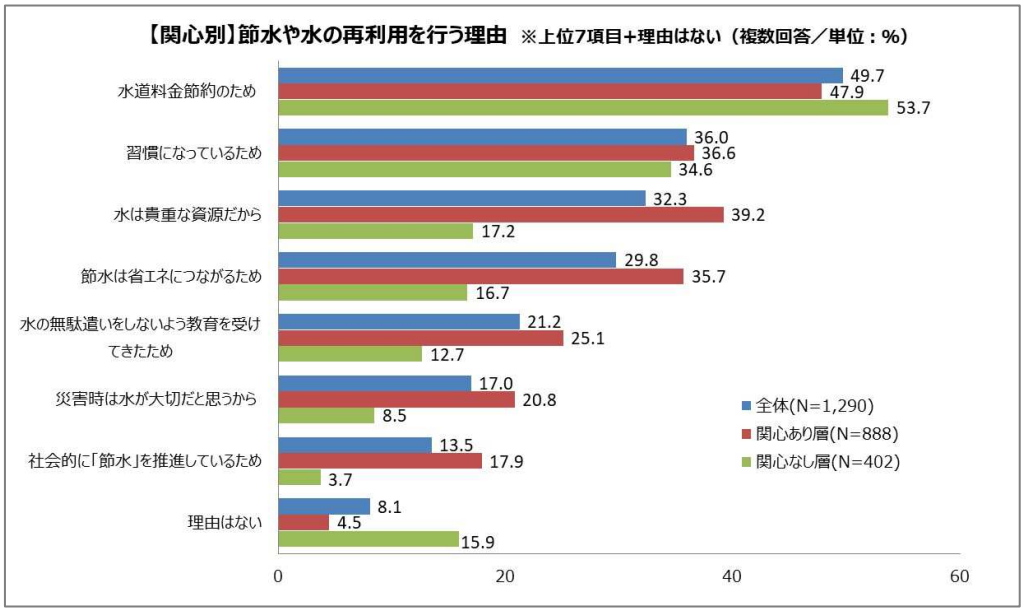
◇社会的な大義から、よりパーソナルな方向にシフト？

前述の日常生活で実践していることについての理由を、選択肢を提示してたずねたところ、「水道料金節約のため」が5割近くの回答（49.7%）でトップとなり、2位「習慣になっているため」（36.0%）、3位「水は貴重な資源だから」（32.3%）、４位「節水は省エネにつながるため」（29.8%）、５位「水の無駄遣いをしないよう教育を受けてきたため」（21.2%）、６位「災害時は水が大切だと思うから」（17.0%）、7位「社会的に『節水』を推進しているため」（13.5%）と続きました。各項目の数値を昨年と比べると、「水は貴重な資源だから」「節水は省エネにつながるため」「社会的に『節水』を推進しているため」といった、いわゆる社会的な大義を理由とした項目は大きく減少し、「習慣になっているため」「水の無駄遣いをしないよう教育を受けてきたため」といった、よりパーソナル寄りの理由が増加しました。



◇水への関心とは関係なく無意識に節水できている？

水への関心別に、節水や水の再利用を行う理由をみてみると、“関心なし層”は、“関心あり層”に比べて全般的に数値が低く、上回っているのは「水道料金節約のため」（関心あり層47.9%、関心なし層53.7%）と「理由はない」（関心あり層4.5%、関心なし層15.9%）のみでした。また、「習慣になっているため」（関心あり層36.6%、関心なし層34.6%）については、あまり大きな差がありませんでした。「水道料金節約のため」の数値の高さは、「水に関心がなくても水道料金が家計に与える影響は気になる」という意識の表れでしょうか。また、「理由はない」や「習慣になっているため」の数値が高いのは、実は無意識に節水できているからなのかもしれません。

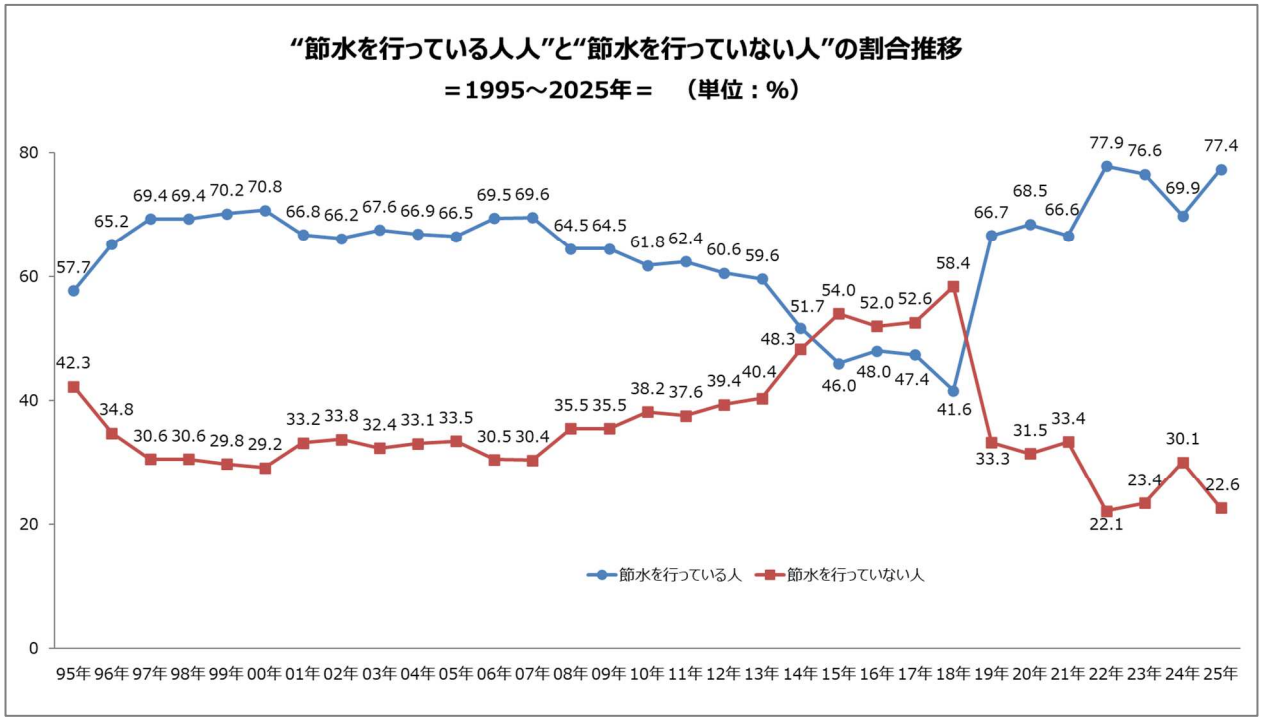


沖大幹先生による解説　～Oki's View～　①

【節水行動は増えているのか？】

「あなたは、日常生活において節水を行っていますか？」という問いに対して「行っている」と答えた割合は2019年の66.7%から今年は77.4%になり、着実に増えつつあるようにみえる。しかし、「あなた（またはあなたのご家庭）の水の使い方は？」という問いをしていた1995年から2018年の調査では、「多少節水や再利用しながら水を使っている」や「かなり節水や再利用をしている」という回答の和は2000年の70.8%をピークに2018年には41.6%にまで低下していた。聞き方によって変わったというよりは、選択肢として節水しているかしていないか、と問われると節水しているが、「節水・再利用は気にしながらも、特に何もせずに水を使っている」という選択肢があると、そう答える人が多いということだったのかもしれない。ちなみに、2018年に「節水・再利用のことは気にせずに、水を使っている」と答えた人は18.7%で、2025年に節水を「行っていない」と答えた人の22.6%に比較的近くなっている。

節水行動を実践する理由として49.7%の人が「水道料金節約のため」と回答し相変わらず1位であるが、「習慣になっているため」が昨年の32.0%から36.0%に増加して4位から2位にあがり、「教育を受けてきたため」が昨年6位18.0%から21.2%で5位にあがり、社会規範として定着しつつある様子がうかがえる。



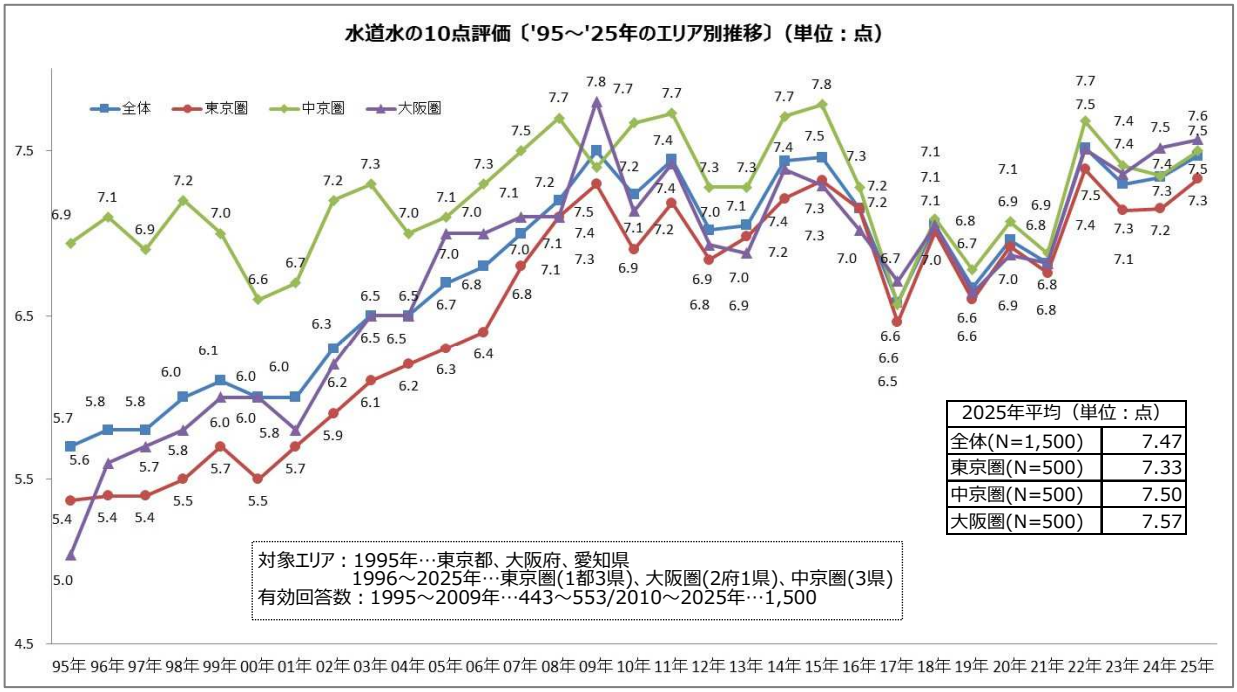
※1995年～2018年は、「家庭における水の使い方」を問う調査として、「節水・再利用を気にせずに水を使っている」「節水・再利用を気にしながらも、特に何もせず水を使っている」「多少節水・再利用しながら水を使っている」「かなり節水・再利用をしている」の4択で実施していたため、上記グラフでは「多少節水・再利用しながら水を使っている」と「かなり節水・再利用をしている」の合計を"節水を行っている人"、「節水・再利用を気にせずに水を使っている」と「節水・再利用を気にしながらも、特に何もせず水を使っている」の合計を"節水を行っていない人"としている。

水道水に関する意識

Q.水道水を10点満点で評価すると？　（0～10の整数を自由回答）

◇全体の平均点は7.47点
**　大阪圏が7.57点で昨年に続きエリア別トップ**

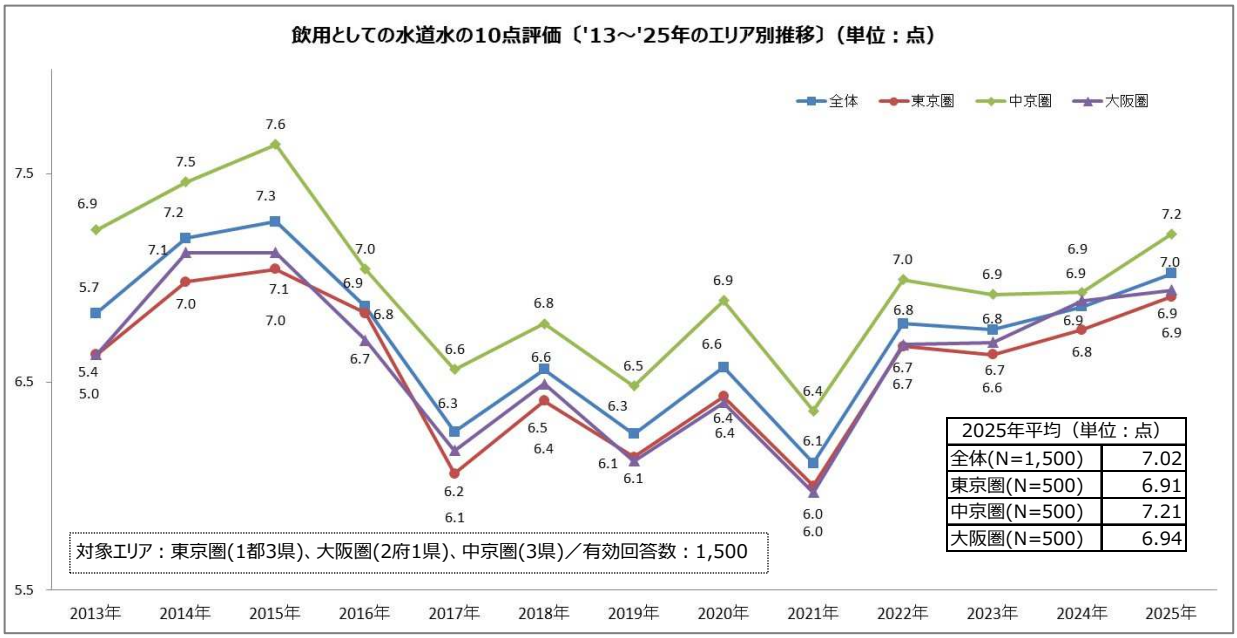
水道水の10点満点評価は、全体の平均が昨年比0.13ポイント増の7.47点でした。これは、2022年の7.52点、2009年の7.50点に次いで過去3番目に高い点数となります。居住地別では、東京圏が昨年比0.18ポイント増の7.33点、中京圏が同0.15ポイント増の7.50点、大阪圏が同0.05ポイント増の7.57点となり、大阪圏が昨年に続いてのトップでした。



Q.水道水を飲用水として10点満点で評価すると？　（0～10の整数を自由回答）

◇全体の平均点が2015年以来の7点台

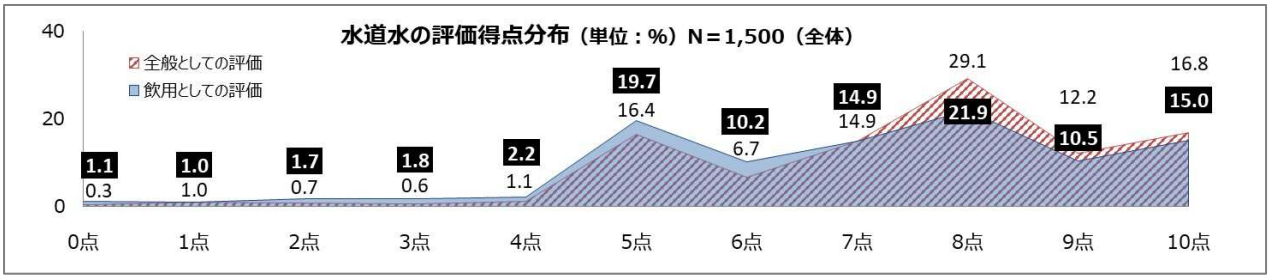
飲用目的に限定した水道水の10点満点評価は、全体の平均が昨年比0.16ポイント増の7.02点で、2015年以来の7点台となりました。居住地別では、中京圏が昨年比0.28ポイント増で3エリア唯一の7点台となる7.21点、東京圏が同0.16ポイント増の6.91点、大阪圏が同0.05ポイント増の6.94点でした。



沖大幹先生による解説　～Oki's View～　②

【水道水への評価】

全般的な水道水の評価は昨年の7.34点から今年は7.47点に、飲用としての水道水の評価も昨年の6.86点から今年は7.02点に増加しており、満足度が増している様子がうかがわれる。ただし、回答分布をみると、全般的な評価では10点満点で8点と答えた人が29.1%で最も多く、次が10点の16.8%、僅差で5点が16.4%となっているのに対し、飲用としての評価ではやはり8点が21.9%でもっとも多いが、次は5点の19.7%、10点は15.0%で7点の14.9%と大差ない。飲用としての水道の評価はやや厳しいことが読み取れる。



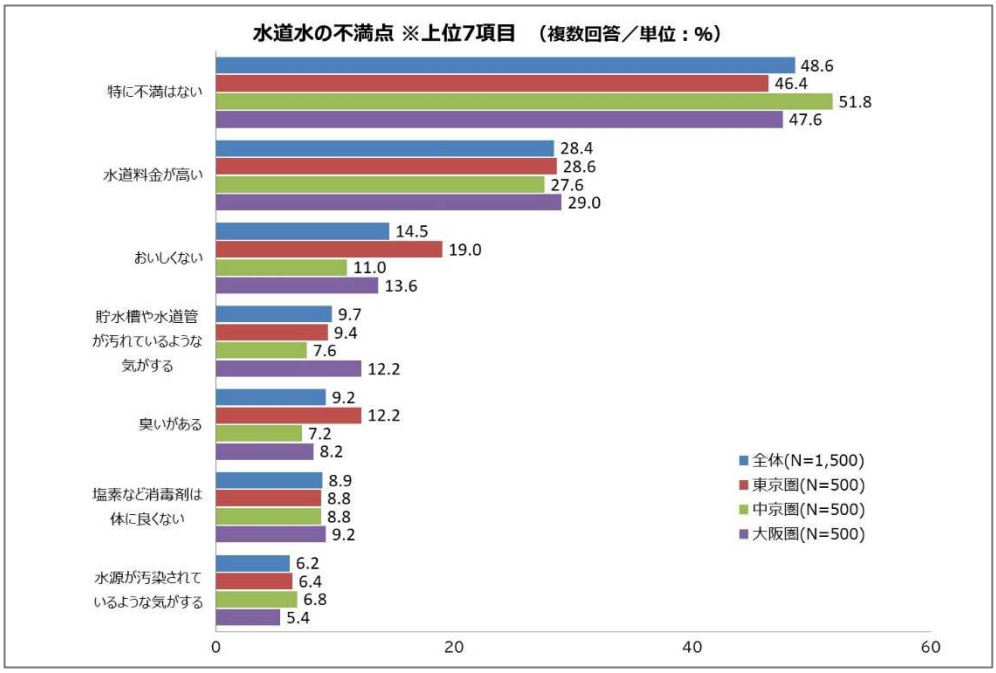
※白抜きは「飲用としての評価」の数値

Q.水道水について不満を感じていることは？　（8択＋その他＋特に不満はない）

◇半数近くが「不満なし」
「味」や「品質」への不満に地域差あり

水道水への不満については、近年、「特に不満はない」が5割に近い数値で推移しており、今年も48.6%と半数近くの人が回答しトップとなりました。2位（不満のトップ）は「水道料金が高い」（28.4%）、3位は「おいしくない」（14.5%）、4位「貯水槽や水道管が汚れているような気がする」（9.7%）、5位「臭いがある」（9.2%）と、これらも例年と同様の傾向でした。

居住地別でみると、「特に不満はない」（東京圏46.4%、中京圏51.8%、大阪圏47.6%）は、中京圏が3エリアで唯一の過半数超えとなりました。また、不満点については、「水道料金が高い」は東京圏28.6%、中京圏27.6%、大阪圏29.0%とあまり差異が見られなかったものの、「おいしくない」（東京圏19.0%、中京圏11.0%、大阪圏13.6%）や「臭いがある」（東京圏12.2%、中京圏7.2%、大阪圏8.2%）は東京圏がやや高く、「貯水槽や水道管が汚れているような気がする」（東京圏9.4%、中京圏7.6%、大阪圏12.2%）は大阪圏がやや高いなど、「味」や「品質」への不満に地域差が見られました。



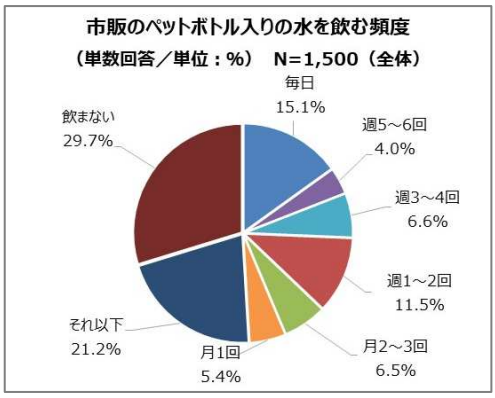
「ペットボトル入りの水」に関する意識

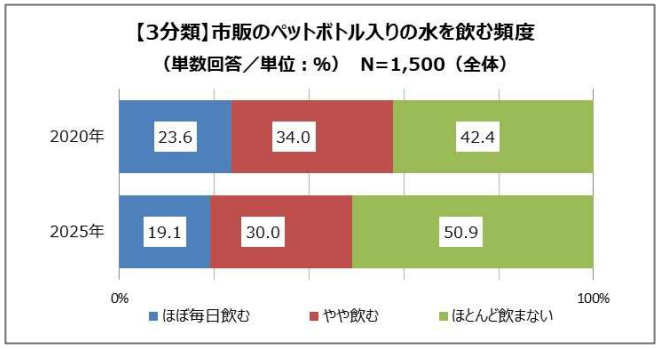
日本でレジ袋有料化がスタートした2020年、当センターでは、世界的な脱プラスチックの流れの中で、水とプラスチックの関わりの象徴ともいえる「ペットボトル入りの水」に焦点をあてた調査を実施。今回、5年後の変化をみる趣旨で、いくつかの設問について再調査を行いました。

Q.市販のペットボトル入りの水を飲む頻度は？（7択＋飲まない）

◇月1回未満の“ほとんど飲まない人”が過半数

普段、市販のペットボトル入りの水を飲む頻度は、「毎日」15.1%、「週5～6回」4.0%、「週3～4回」6.6%、「週1～2回」11.5%、「月2～3回」6.5%、「月1回」5.4%、「それ以下」21.2%、「飲まない」29.7%となり、これを週5回以上の“ほぼ毎日飲む人”、週4回～月1回の“やや飲む人”、月1回未満の“ほとんど飲まない人”の3段階に分類したそれぞれの割合は、19.1%、30.0%、50.9%でした。2020年と比較すると、“ほぼ毎日飲む人”は4.5ポイント減で2割を下回り、“ほとんど飲まない人”は8.5ポイント増で過半数を超えました。一般社団法人日本ミネラルウォーター協会「ミネラルウォーターの1人当り消費量の推移」によると、日本では2020年33.3リットル/年→2024年41.6リットル/年と増加していますが、頻度として増えているという実感はそれほどないのかもしれません。

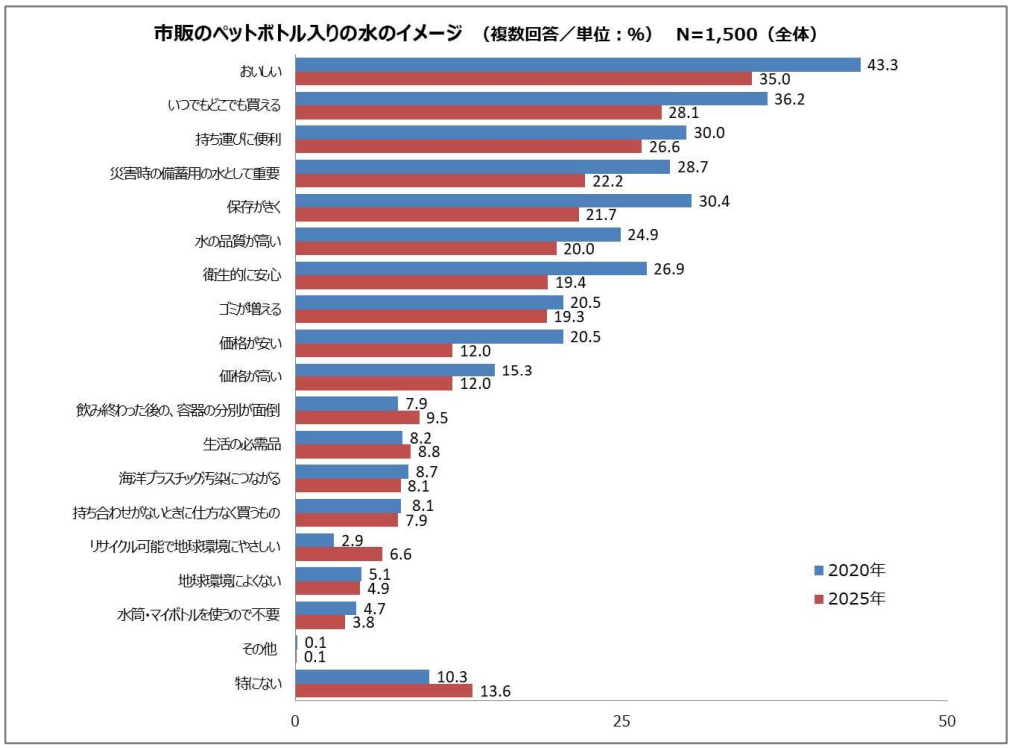




Q.市販のペットボトル入りの水のイメージは？（17択+その他+特にない）

◇ポジティブなイメージが上位を占めるも、各項目の数値は減少

市販のペットボトル入りの水のイメージについて、選択肢を提示して聞いたところ、1位「おいしい」（35.0%）、2位「いつでもどこでも買える」（28.1%）、3位「持ち運びに便利」（26.6%）、4位「災害時の備蓄用の水として重要」（22.2%）、5位「保存がきく」（21.7%）と、トップ5にはすべてポジティブなイメージが入りました。ネガティブなイメージで比較的回答が多かったのは「ごみが増える」（19.3%）や「価格が高い」（12.0%）で、それ以外は一桁台の回答率となっています。2020年の調査結果と比較すると、上位項目や、「ポジ＞ネガ」の傾向に変化はありませんでしたが、上位を中心とした各項目の数値は概ね減少しました。



沖大幹先生による解説　～Oki's View～　③

【ペットボトル水の評価】

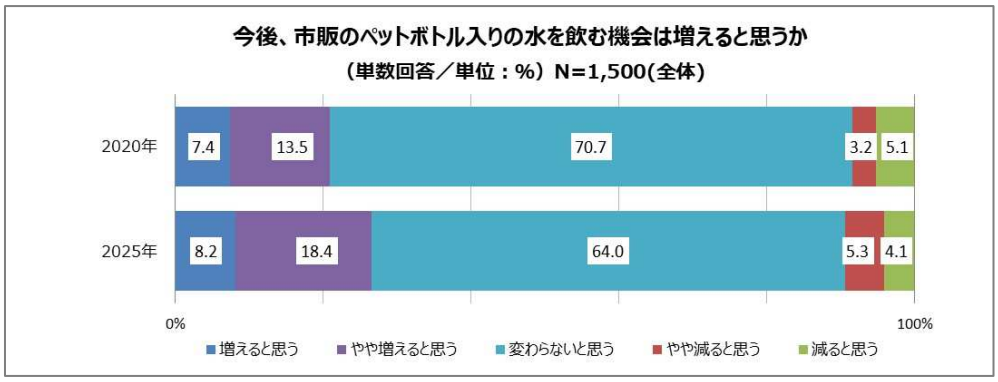
プラスチックのストローが鼻に刺さったウミガメの衝撃的な映像が2015年に話題になったのをきっかけとし、プラスチック廃棄物による海洋汚染防止への取り組みが世界的に高まり、ストローのみならず、プラスチック製品全般の消費削減が環境保全の目標となった。石油など化石資源起源のプラスチックに対し、木材は再生可能資源であるという認識から、それまでの紙の消費削減志向は180度逆転し、紙製のストローや容器がプラスチック製品の代替として用いられるようになり、こうした情勢を受けて国によってはペットボトルの使用を禁止し、ガラス瓶で代替される様になったりしている。

ただでさえ、すぐに溜まる空きペットボトルの山に罪悪感を覚えがちなところ、プラスチックへの悪い印象が重なったせいか、市販のペットボトル入りの水へのイメージが、2020年に比べるとぐっと悪くなっている。おいしいと答えた人が43.3%から35.0%へ、保存がきくと答えた人が30.4%から21.7%へ、衛生的に安心と答えた人が26.9%から19.4%へ、水の品質が高いと答えた人が24.9%から20.0%へと下がっている。もっとも、海洋プラスチック汚染につながると答えた人は8.7%から8.1%へと下がり、地球環境によくないと答えた人も5.1%から4.9%へと下がっていて、リサイクル可能で地球環境にやさしいと答えた人は2.9%から6.6%へと大幅に増えており、ペットボトルの環境影響への認識には人による差が大きいのかもしれない。特にないと答えた人が10.3%から13.6%へと増えており、価格が高いと答えた人も低いと答えた人も減っているので、もしかすると、ペットボトル入りの水への関心自体が下がっているのかもしれない。

Q．今後、市販のペットボトル入りの水を飲む機会は増えると思うか？（5択）

◇4人に1人以上が"増えると思っている"

今後、市販のペットボトル入りの水を飲む機会は増えると思うかをたずねたところ、「増えると思う」8.2%、「やや増えると思う」18.4%、「変わらないと思う」64.0%、「やや減ると思う」5.3%、「減ると思う」4.1%となりました。このうち、「増えると思う」「やや増えると思う」を合計すると、4人に1人以上（26.6%）が"増えると思っている"と回答。2020年からは約6%の増加となっています。

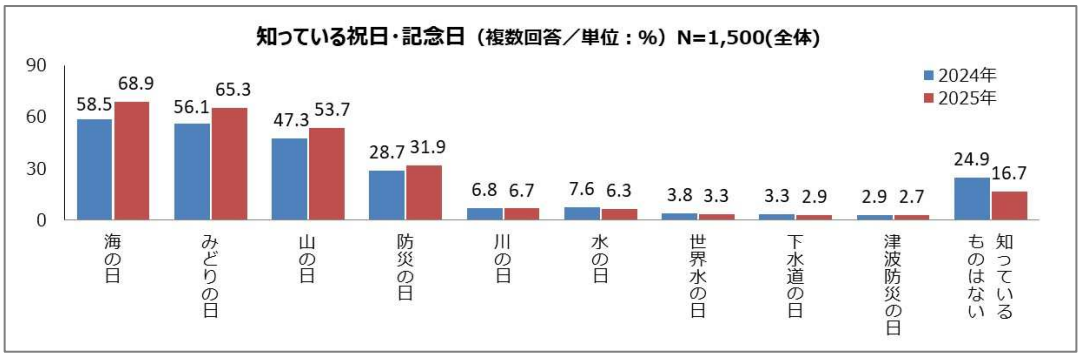


水と生活・文化

Q.知っている祝日・記念日は？（9択＋知っているものはない）

◇水に関する記念日の認知上がらず

水や自然にかかわる祝日・記念日の認知については、祝日である「海の日（7月第3月曜日）」（68.9%）、「みどりの日（5月4日）」（65.3%）、「山の日（8月11日）」（53.7%）の認知率が総じて高く、いずれも昨年を上回る結果となりました。祝日以外では、「防災の日（9月1日）」（31.9%）の認知率が抜けて高く、数値も昨年を上回ったのに対し、「水の日（8月1日）」（6.3%）をはじめ「世界水の日（3月22日）」（3.3%）、「下水道の日（9月10日）」（2.9%）といった水に関する記念日はいずれも一桁台で、且つ昨年から減少しています。

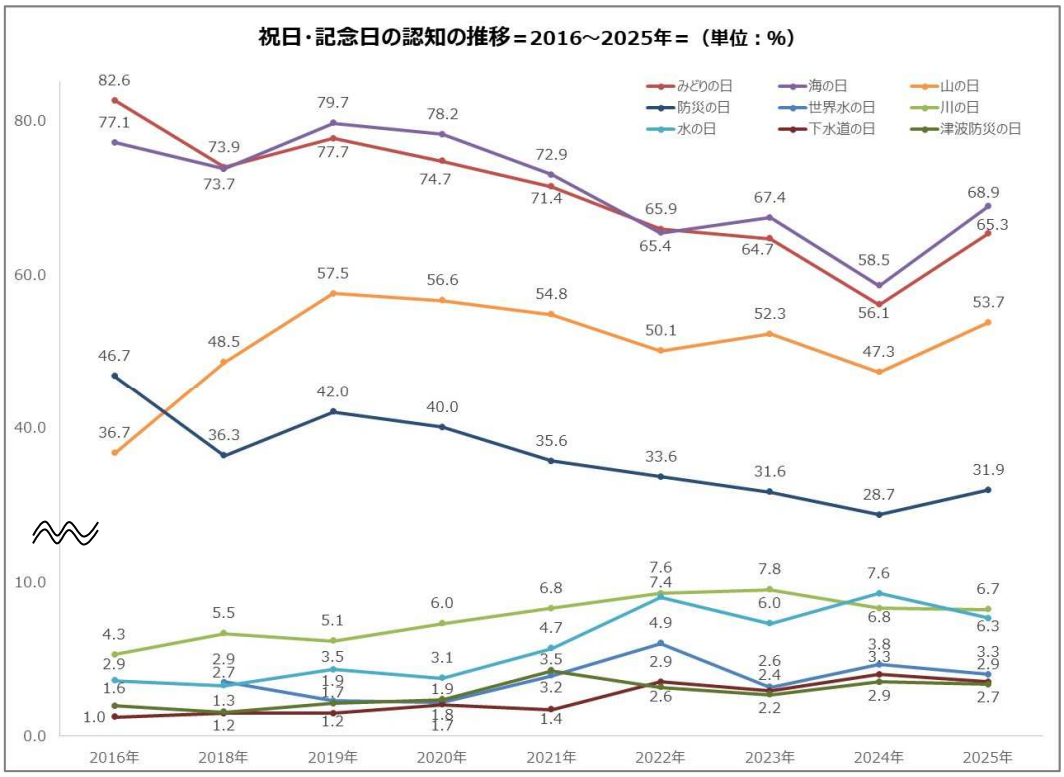


沖大幹先生による解説　～Oki's View～　④

【水の日の認知度】

水の日の認知度が伸び悩んでいる。史上最高の7.6%を記録した2024年に引き続きさらに認知度が伸びるかと期待していたが、今年はやや下がって6.3%であった。それでも2023年の6.0%よりは高いが、2022年の7.4%を下回っており、当初2016年の4.3%からの伸びに比べるとここ数年は認知が拡がっていない。

3月22日の世界水の日は3%前後、7月7日の川の日は7%前後、9月10日の下水道の日は3%前後でそれぞれ伸び悩んでいるのをみると、関連する記念日の乱立が認知の拡がりを阻んでいるようにも想像されるが、それぞれの事情もあり、行政の所管のような統一は難しいだろう。祝日ではないのに高い認知度を誇る9月1日の防災の日も、長期的には2016年の46.7%から2024年の28.7%(今年は31.9%)まで長期低下傾向にある。そうした傾向は祝日であるみどりの日や海の日でも同様なので、祝日で記念行事が行われれば認知が拡がるというものでもないのかもしれない。○○の日、が増え、祝日も増えた結果、祝日や記念日に対するわたしたちの関心そのものが薄れていると考えられる。



※2017年は未調査

沖大幹先生プロフィール

沖 大幹（おき たいかん）
東京大学 大学院工学系研究科 教授
「ミツカン水の文化センター」アドバイザー

1964年東京生まれ。1993年博士（工学、東京大学）、1994年気象予報士。1989年東京大学助手、1995年同講師等を経て2006年より同教授。2016年より21年まで国連大学上級副学長、国際連合事務次長補を兼務。専門は水文学（すいもんがく）で、地球規模の水循環と世界の水資源に関する研究。書籍に『水の未来』(岩波新書、2016年)、『水危機 ほんとうの話』(新潮選書、2012年)など。2024年には、水のノーベル賞とも呼ばれる「ストックホルム水大賞」に選ばれ、紫綬褒章を受章。その他生態学琵琶湖賞、日本学士院学術奨励賞、日本人として初の国際水文学賞Doogeメダル受賞(2021年)やヨーロッパ地球科学連合John Daltonメダル(2023年)など表彰多数。

「ミツカン水の文化センター」と「水にかかわる生活意識調査」について

創業の地である愛知県の知多半島は水が得にくい土地柄だったため、文化元年（1804年）の創業時より、良質な醸造酢をつくる為に山から木樋で水を引くなど、水の苦労を重ねてきました。また、廻船で尾張半田から江戸まで食酢を運んで社業の基礎を築くなど、水と深いかかわりを持ってまいりました。

このように創業以来、「水」の恩恵を受け、「水」によって育てられてきたミツカングループは、1999年に「水の文化センター」を設立し、「水」をテーマとする社会貢献活動を行っています。

「水にかかわる生活意識調査」は、1995年にセンターの活動開始に先駆けて、「日常生活における水とのかかわり」について調べてみようと考えたのがきっかけで始まりました。さまざまな生活の中での水への意識を、四半世紀にわたって調査、発表し続けており、今年が31回目となります。